

とうきょうすくわくプログラム活動報告書

学校番号	1366718
学校名	日本聾話学校

1. 活動テーマ

<テーマ> 4歳児・5歳児合同・・・「のびのび体育 いろいろな技に挑戦しよう～鉄棒遊び～」

<テーマ設定理由>

本校幼稚部では、健やかな身体の発達を促すために、4歳児と5歳児は年間10回ほどの運動遊びを行っている。そのときどきの子どもの実態に応じ、内容を幼稚部教員と指導者である本校中学部の体育教諭が相談し、実施している。本校は中学部までの一貫校でもあるため、体育科の教員が幼児期から同じ子どもにかかわり、その成長や支援の在り方について連続性を持った取り組みができることにも良さを感じている。

今回は主に鉄棒を使った活動を計画した。鉄棒は幼児期の子どもたちにとって楽しく、かつ発達に非常に有益な活動である。鉄棒遊びを通し、筋力や握力の向上をはじめとする全身の発達を促したり、バランス感覚が養われたりする。また、達成感を味わい、自信をつけることができると考え、実践することとした。子どもたちの鉄棒遊びの経験はさまざまではあるが、動物に見立てたぶら下がり方や握り方、回り方をすすんで楽しみ、身体を動かすことへの意欲が高まることを願って設定した。

2. 活動スケジュール

令和6年6月から3月(月2回程度)。鉄棒や平均台を中心とした活動は10月中旬から11月中旬の3回。

3. 活動のために準備した道具や環境の設定

- ・可動式鉄棒2台(高さ可変のもの、70cm設定と80cm設定でスタート) ・鉄棒マット2枚
- ・平均台3本 ※すべて室内(ホール)での活動

4. 探究活動の実績

<活動内容>

- 3回の実践のうち、報告書では2回目(10/30)を中心に取り上げる。
- ・前回の鉄棒あそびでやったことを思い出す。手を離さないことの確認をする。
- ・絵カードを手掛かりに、「豚の丸焼き」がどんな技か考えたり、知ったりする。
- ・実際にやってみる
- ・「おさるのお絵描き」についても同様に行った。
- ・教師は運動や体格の個人差を配慮しつつ、必要な補助をしながら、達成感を持てる声掛けをするようにした。

<子ども(C)と教師(T)のやりとり>

① 技「豚の丸焼き」

T:今日はここから入ります(豚の丸焼きの絵を提示)

C:すごい

T:見たことある?

C:豚を焼いている。豚を倒して焼いている。

T:倒してっていうか、これね「豚の丸焼き」

C:豚がかawaiiそう

T:かawaiiそうだね、でもね、食べてるでしょ

T:今日はこれをやってみます → 実技へ



② 技「お猿のお絵描き」

T:(猿の絵カード提示)

C:え、おさる？

T:おさるさん

C:おさる／アイアイ～

T:おさるのお絵描き。どうやってやるか？

T:ぶらさがりあったでしょう。ぶら下がって1本手を離す

C:これなんかできる → 実技へ



5. 振り返り

- ・どの技も、絵カードを用いることにより、子どもたちは技のイメージを持ちやすかったようだ。
- ・子どもたちはイメージを持ったうえで、実践しようとしていた。先にやって成功する子がいると、さらに「自分もやってみたい」という意欲が高まっていた。
- ・発語の状況に大きな個人差があるため、声だけを文字に起こすと上記のようになる。しかし、発語がない子どもたち一人ひとりにも、絵カードの提示により新しいことがらとの出会いや心の動きが起こっていたことは、表情やしぐさから見つけることができた。
- ・①では、豚の丸焼きの絵を見て、驚く表情を浮かべた子、発言のように豚に感情移入して「(焼かれると)かわいそう」というイメージを持つ子がいた。教師はそれを受け止めながら、鉄棒にぶら下がる技の提示をした。
- ・②では、猿のユーモラスな絵に笑いが起こった。猿については、9月に行った遠足で本物を見たり、動きに注目したりした経験があったので、身近に感じていたようだった。さらに、この時期、学芸会に向けて猿の役を演じる子どももいたため、特徴的な猿の動きを鉄棒の前後に真似をする様子も見られた。それぞれの子どもなりにイメージを広げて、鉄棒遊びの技に挑戦する意欲が高まる取り組みだった。
- ・事前の相談では、もう少し「どのようにつかまるか」「どんな動きか」について時間を取って考えることにしていたが、やや教師が早く実践につなげたい気持ちが強かったかもしれない。子どもの経験や生活背景について参考になるような情報を担当教師により詳しく伝えておくともよかっただろう。もう少し子どもからの声や発信を待ち、受け止め、それをさらに他の子どもへも共有する時間を持てたらよかった。今後に生かしたい。